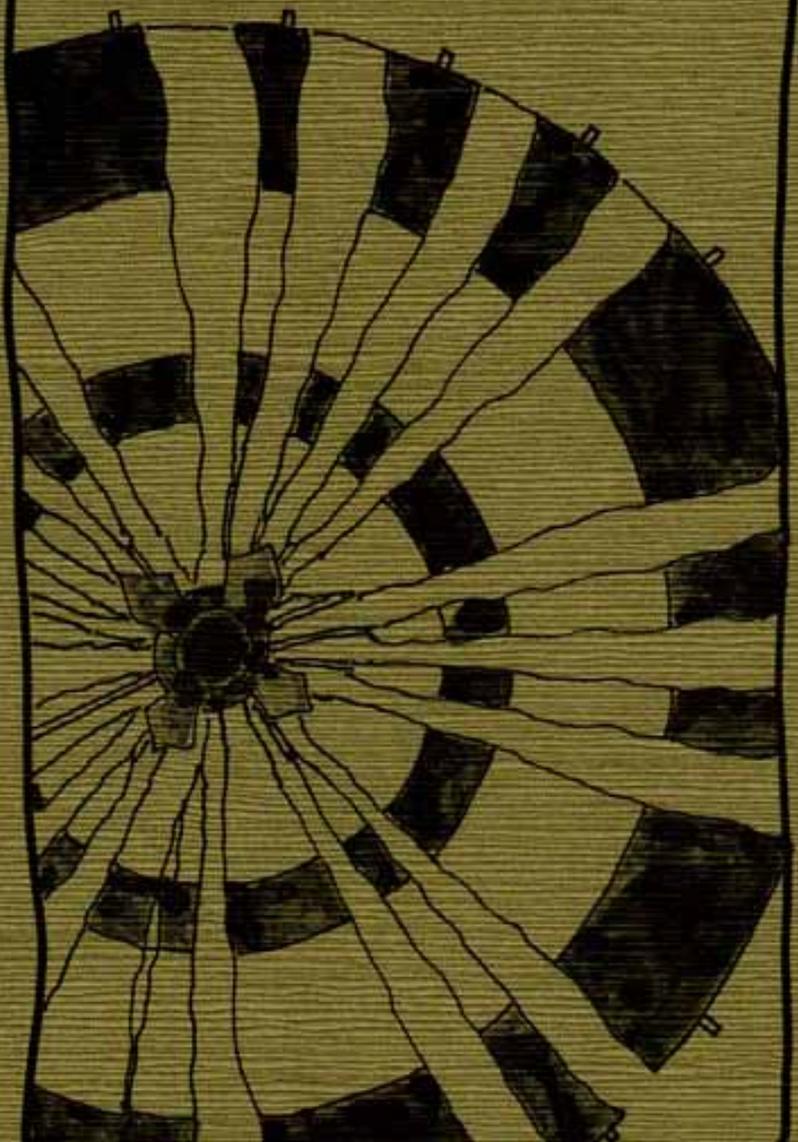


# やぶれ傘



一一二二号  
二〇二二年十月

風の寄る紫苑の丈となりにけり 根橋宏次  
 どぶ川にちろちろ落つる秋の水 大島英昭  
 二百十日棚に逆さの広辞苑 きくちきみえ  
 いつの間にか故人を想ひるる残暑 丑久保 勲  
 銀杏の青き実が落つ頃となり 白石正躬  
 コスモスに園児の帽子見え隠れ 廣瀬雅男  
 九月ゆく白髪と爪がよく伸びて 藤井美晴  
 虫時雨ひと近づくと点くライト 瀬島酒望  
 ガードレールに雨跡残る茨の実 天野美登里  
 炎昼のだから坂をだらだらと 青谷小枝  
 スーパーの倉庫に明かり鉦叩 小山よる  
 落し文耳をよせれば音のする 有賀昌子  
 石仏が石屋の前に秋の蝶 渡邊孝彦  
 虚栗とんと蹴られて裏返る 安藤久美子  
 稲妻を背にして溪を下りけり 秋山信行

## 抄 集 句 傘 紀 大 崎 野 紀 夫 選

向日葵にじつと見られてゐるやうな 浅嶋 肇  
 転げ落つ利那翅出すてんとむし 石塚清文  
 真つ直ぐな北海道の夏の道 泉 一九  
 白玉を茹でる電話が鳴つてみて 木村瑞枝  
 畳屋に畳のにはひ涼新た 倉澤節子  
 座せばすぐ膝へ猫のる夜の秋 小泉里香  
 新盆の兄の写真は本棚に 佐藤稲子  
 雲の峰塗り直されし二の鳥居 柴崎和男  
 秋の雨ボールペン置き外を見る 高橋宜治  
 折り紙の襟を合はせる夜の秋 中島和子  
 桐一葉土蔵の木舞あらはなり 萩原溪人  
 蓮の実の弾けて寺の庭静か 橋本美代  
 秋風を窓より入れて風呂介助 日高みち子  
 桔梗や沢にさはさは俄雨 箕田健夫  
 鉛筆を削り揃へて朝涼し 山本久枝

柘榴

大崎紀夫

雨樋と壁灼けてをり馬穴また  
本棚を見ると蠅虎がゐる  
いなご捕る子らがたちまち遠去かる  
蟬しぐれゴミを出す日のゴミを出す  
日は真上かぼちやの花は道ばたに

また釣れてくる菱の実の真黒な  
籾殻を焼く煙突ははすかひに  
砂利道にちよぼちよぼと草ちちろ鳴く  
秋の雨タイヤぐにやりと接岸す  
竹煮草田んぼの上が暮れてゐる  
手の柘榴皿にこつんと置いて夜  
草の花ベンチにみると鳩がくる

紫苑

根橋宏次

にはとりのあひだを通り黍畑へ  
 もうひとつ遠くの方に威銃  
 水澄んでくちぼそなどもその辺に  
 教習車とろとろ前をゆく厄日  
 畑でなく空地でもなくずこ玉  
 踏板をときにたわませゆく花野  
 雲を見て臭木の花をみてとほる  
 吾亦紅雲ながれつつうすれつつ  
 とりどりの毛鉤が箱に小鳥来る  
 風の寄る紫苑の丈となりにけり

秋の雲

大島英明

畑道のくねくねに沿ふ崔の花  
 街へゆく空のトラックひでり畑  
 農協の開くまで五分秋暑し  
 サイレンに犬が応へてゐる残暑  
 どぶ川にちろちろ落つる秋の水  
 国道のあたりあかるし芋あらし  
 買ふ人がきてゐる葡萄直売所  
 ふはふはのまま千切れゆく秋の雲  
 つづれさせ誰にも遇はぬ筈の道  
 後から車がとほるをみなへし

二百十日

きくちきみえ

日の暮れは蟬の骸がカタと揺れ  
夏雲の前を飛行機上昇中  
藪つ蚊と乗り合はせたるエレベーター  
柔らかく萎んでいたる酔芙蓉  
捨て鉢のいつもそのまま草の花  
梨一個剥いて大方もてあます  
夕暮れの空地膨らむねこじやらし  
念入りに犬にかがれる草の花  
人を差す指で白桃触りけり  
二百十日棚に逆さの広辞苑

残 暑

丑久保勲

風鈴を物干し竿に吊つてみる  
パソコンのコンセント抜く日雷  
車窓より小船一隻夏の海  
鳩のこゑ朝からしきり夏の果  
黒雲が真上を通る百日紅  
午後八時どんと花火の音がして  
向うから自転車がくる星月夜  
いつの間にか故人を想ひゐる残暑  
秋涼し髭を当たつて歩きに出  
貨物列車はけふも四時頃花おしろい

銀杏

白石正躬

渡船小屋まはりの草が刈られけり  
さつまいもの蔓返しをりお昼時  
雨続く南瓜の花がよく咲いて  
屋敷から出てまた戻る秋の蝶  
雨の夜の玄関先のちちろ虫  
頂上はただただ青き秋の空  
川岸の石に石乗せ秋暮るる  
銀杏の青き実が落つ頃となり  
秋晴れの日中の犬へ声をかけ  
彼岸花山田の脇に群れをなし

コスモス

廣瀬正雄

赤蜻蛉思ひ出せないことばかり  
鳳仙花はじけて雨となりにけり  
角曲る白粉花を目じるしに  
切り売りの西瓜ひとつを土産とす  
ひさびさに散歩に出れば赤のまま  
カンナ咲く六年生の花壇かな  
ボール蹴る子らに踏まれてねこじやらし  
お参りを済ませてからの生姜市  
朝からの風をさまらぬ萩の花  
コスモスに園児の帽子見え隠れ

満月

藤井美晴

扇風機止まれば昼の雨の音  
バルザック像のガウンを秋の風  
九月ゆく白髪と爪がよく伸びて  
濡れ縁の木目に午後の秋日差す  
薄闇にふはりと烏瓜の花  
鼻先をよこぎる秋の紋黄蝶  
満月へヘリコプターが飛んで行く  
百舌たける日向に猫があくびして  
秋深む積みて読まざる本の数  
曼殊沙華掘り起こされし土にほひ

虫時雨

瀬島洒望

ガガンボのどの足取れてしまつたか  
滝音の聞こゆる茶屋で昼餉摂る  
レンタカー返して終はる避暑の旅  
お風呂場の窓を守宮が這つてゐる  
なつあざみヴィーナス裸像立つ石屋  
跨線橋下に機関車油照り  
耳元で乾いた羽音して蜻蛉  
校庭で生徒案山子を組んでゐる  
スプーンを曲げるマジック敬老日  
虫時雨ひと近づくと点くライト

茨の実

天野美登里

街川の引き潮に散る百日紅  
夏深し三和土の隅に団子虫  
水風呂に足をバタバタ浮いてこい  
干拓の畦道真直雪加鳴く  
朝市の旅に盛られし海鞆を買ふ  
カンナ咲く踏切はカンカンと鳴り  
草刈りや隣の犬のよく吠える  
農小屋の鍵の錆びぬる曼珠沙華  
沼べりを亀歩きゆく吾亦紅  
ガードレールに雨跡残る茨の実

炎昼

青谷小枝

炎昼のだらだら坂をだらだらと  
校庭にジャングルジムとすべりひゅ  
とらへたる児を素裸に丸洗ひ  
動くものなし操車場ただ灼けて  
蟬時雨SLのせる転車台  
居酒屋の椅子ががたつく生ビール  
秋立てりほどきて洗ふズツク紐  
初秋のドレッシングがすつぱすぎ  
涼新たな影絵の鳥は口開いて  
窯跡へ陶片木の実ざくと踏み

鉦 叩

小山よる

軒下にタオルと秋の風鈴と  
昼の陽の当たるあたりに草の花  
秋簾坪庭にある三輪車  
百円のバスマット踏む秋の夜  
右耳に合はぬイヤホン秋暑し  
秋曇鳩が車に轆かれさう  
また一人カフェを出ていく秋の宵  
スーパリーの倉庫に明かり鉦叩  
コンビニの脇に御旅所秋祭  
パンプスをおろした今日は秋日和

落し文

有賀昌子

原つばで野菊摘みたる手のほてり  
つれづれに香を聞いてゐる盆の月  
青みかんとウインナ五本弁当に  
風死して丸太のごとくねむる熊  
糠床の胡瓜いつぽん取り出して  
水滴とも胡瓜のいぼの光りゐる  
落し文耳をよせれば音のする  
蟬しぐれ僧侶はこゑを張り上げて  
うろこ雲尾根をゆく牛列なして  
老鶯が遠くでケキヨと鳴いてゐる

秋明菊

渡邊孝彦

夕方の波が岩場に浜おもと  
夕蟬の長き一鳴き流れ雲  
溝蕎麦がせせらぎ隠し切る程に  
花芙蓉川の親水広場暮れ  
仏壇を掃除してゐる野分後  
路地暮れて秋明菊の五六輪  
石仏が石屋の前に秋の蝶  
公園の入口辺り蚯蚓鳴く  
ちちろ鳴く一番星が樹の上に  
ジヨギングの少女が過ぎる曼珠沙華

虚栗

安藤久美子

エコバッグいろいろ増えて涼新た  
手長猿の手に見とれゐる秋の昼  
わんさかと紫式部の実が揺れて  
今日の月ヒマラヤ杉の天辺に  
金木犀香る二階に居る時間  
掌に載せてけっこう重き柘榴の実  
白粉花尖塔見ゆる街に住む  
秋の蚊は頬へ机上にミステリー  
虚栗とんと蹴られて裏返る  
半日を秋の上野の美術展

◇11月・12月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
11月	2日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	2日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	3日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	5日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	5日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン1	秋山信行
	20日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	27日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	27日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
12月	3日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	3日(金)	PM6:00	なごみ会	武蔵浦和コミセン	秋山信行
	6日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン4	丑久保 勲
	7日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	7日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	18日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	19日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	さいたま市・見沼	丑久保 勲
	25日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	25日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

[注] ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

12月19日(日)の吟行。集合 10時。JR北浦和駅改札口。

吟行地 さいたま市・見沼。通船堀と芝川土手。

句会場 武蔵浦和コミセン・第2集会室

柿 秋 稲 軒 せ 曲 父 じ 前 虹  
あ し 妻 ぞ せ 芸 の の つ と 山 立  
か し 背 と ら の 忌 の と 山 の つ て  
し ぐ を に ら の の 墓 の みる 向 か 子  
熱 即 身 仏 は 口 を 下 り け り 窯  
の 身 仏 は 口 を 下 り け り 窯  
残 れ る 登 り 窯  
の 身 仏 は 口 を 下 り け り 窯  
の 身 仏 は 口 を 下 り け り 窯

稲妻

秋山信行

◎連絡先 秋山信行 ☎048-874-0555 藤井美晴 ☎0422-55-2733  
大島英昭 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870  
廣瀬雅男 ☎048-443-7522 丑久保 勲 ☎048-853-3856